
アナザーゼロの使い魔

白猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アナザーゼロの使い魔

【Nコード】

N7530L

【作者名】

白猫

【あらすじ】

平賀才人がルイズに召喚される前にバルケギニアにきてしまう話。基本的には原作どおりにすすむと思います。（多分）

プロローグ（前書き）

小説を書いたのは初めてなので楽しんでもらえるかどうかからな
いですが、楽しんでもらえたら嬉しいです。誤字脱字があったら
教えてください。あと、ここはこうしたほうがいいよとか、ここ
はこう表現したほうがいいよとか、アドバイスがあったらお願い
します。

プロローグ

神隠し、天狗隠しともいわれ、人間がある日忽然と消えうせる現象。文明が発達した現代の地球では非論理的と考えられる現象。事実、神隠しが実際に起こったという事実を決定づけるものはない。しかし同時に不可解な失踪者、誘拐事件といったものも存在する。つまり、神隠しではないと証明するすべもないのだ。なぜなら、消えた人々が戻ってこないのだから。

「え！？・・・ここは？」

立ち並ぶ中世ヨーロッパを想像させる建造物。

レンガを敷き詰めたような地面。

聞き覚えのない言語。

まだ学生で１１歳でしかない彼を恐怖に叩き込むには十分すぎる状況だった。

俺は確かに学校から家に向かって歩いていたはずだ。なのにこの状況はいつたい何なんだろう。

自分でも気がつかないうちに通学路が知らない景色に差し替えられていた。

隣を歩いていたはずの友人たちが見たこともない通行人に変わっていた。

結論を出そうにも状況が俺に出すことを許してはくれない。俺の視界に映るすべてが俺の理性を恐怖で侵していく。

理性が侵されていく中、彼は少しでも希望にすがり付こうとほんの少し前まで近くにいた友人の名前を呼びはじめる。

「ユ、ユウスケく近くにいるんだろくでてこいよ」

「な、なあ、ふざけてないさー」

「ユウスケー、ユウスケー」

無意味な行動だった。彼がいくら声をあげても、彼の友人から返事はなく、あるのは彼に向けられている不審者を見るような視線だけだった。

変化のない状況に彼の理性は完全に恐怖に吞まれた。

「うわああああああああ」

彼は声を上げ走り出した。周りが変質者を見るような目で彼を見るが彼はそんなことを気にしてる余裕はなかった。彼は逃げ出したかった。彼を困惑させる、彼に恐怖を与える、彼に絶望を与える、この景色から。

いったいどれだけ人にぶつかっただろう。

いったいどれだけ物にぶつかっただろう。

いったいどれだけ走っただろう。

彼はいまだに知らない景色の中にいる。

時間がたちすでに人々は寝静まっている。しかし、彼は未だに走り続けていた。いや、走っているつもりなのだろう。一步一步確実に前に進んでいるが脚は疲労で小刻みに揺れ、あきらかに限界を感じさせていた。それでも彼を走っているように感じさせるのは彼の必死さと形相だろう。

そして、俺は倒れた。呼吸が荒く、視界がぼやける、体が真から燃えているように熱い、肌寒い夜風すら心地よく感じる。俺はだんだんと落ち着きを取り戻していった。それと同時に冷静さを取り戻した脳が体に休めと命令してくる。俺はそれを無視し、うつぶせだった体を仰向けにする。最後に見ておきたい場所があったからだ。でも、やっぱりそれは見ないほうがいいものだった。俺はそれを見てさっそく後悔した。どんなに走ってもこの状況から逃げられないんだと理解してしまった。だけど、ほんの少しだけ、ほんの少しだけ、だけど、それを綺麗だと思った。俺は意識を手放した。

二つの月が照らす中で平賀才人は眠りについた。

プロローグ（後書き）

次どうしようかいきなり悩んでいます。

第1話 三年後、復讐、そして 前編（前書き）

うゝん、なんか納得いかない。ちよくちよく修正するかも知れませ
ん。

今回も楽しんでもらえたら嬉しいです。

第1話 三年後、復讐、そして 前編

ハルケギニアはハルケギニア大陸を中心とした世界だ。大陸の西に位置する小国、トリステイン。トリステインの東側の国境に接しているガリア王国。トリステインの北側の国境に接している大国ゲルマニア。ガリアの南に位置する宗教国家ロマリア。そして、大陸の東は東方とよばれ、エルフと人間が争い続けている土地である。また、ハルケギニア大陸とはべつに浮遊大陸アルビオンがあり、白の国とよばれ、アルビオンによって統治されている。

彼、平賀才人の物語はトリステインを中心に始まっていく。

トリステインの首都トリスタニアにあるスラム街、そこは平民と貴族が差別化されているトリステインで平民ですらないと判断された人達が住む街。弱者を食い物にする強者の世界、女は抱かれるために生かされ続け、力を持たない男は強者の玩具となる。街はつねに死と腐臭に満たされている。

そんな腐った街のあとる一室に住む二人の男、彼らはこのスラム街の生態ヒエラルキーのトップに君臨する圧倒的強者だった。ほしいものがあれば奪い、気に入らなければ殺す。彼らがスラム街に現れる前までヒエラルキーのトップにいた者達さえ彼らが現れた瞬間から圧倒的弱者に成り下がった。それだけ彼らとそれ以外の者には差があった。その差こそが先天的能力、魔法である。トリステインだけではなく他の4ヶ国においても魔法の使えるものと使えないものとは戦闘における優位性に差が出る。それが彼らがスラム街における圧倒的強者であった所以である。

そう、彼らはスラム街における圧倒的強者だったのだ。ほんの数分

前までは。

なんで、どうして、なぜ、俺の脳はただひたすら疑問だけを生産する。俺の近くには黒髪の少年が殺気を込めた冷たい目で俺を見下ろし、ドアの近くではかつての相棒が片目に食器用のナイフを奥深くまで刺され体中をビクビク震わせながら木の床に横たわっていた。なんでこうなった。俺たちはスラム街では最強なはずだ。どうして相棒を殺されなければならない。なぜこんなガキにこの俺が追い詰められなければならない。なぜ、なぜ、なぜ……。

黒髪の少年が俺の思考遮る様に言う。

「2年ぶりくらいかな、ヴァン・オブ・ヒューストンさん。俺のこ
とまだ覚えてる？」

非常に友好的にな感じの口調だが、声は冷え切っている。

俺は黒髪の少年の声を聞き彼が誰なのか、彼に何をやってきたのかすべてを思い出した。そして彼が何をしにきたのかも理解した。俺は間違いなく殺される。結果を知ってしまった俺はただ怯えることしかできなかった。なぜなら、うつぶせの状態で床に倒され、両腕の骨を折られメイジの証ともいえる杖を奪われているからだ。

1秒2秒と時間が過ぎていく。

「う……あ、あ……うえ……う、う」

体の中に閉じ込めていた恐怖が許容量を超えたのか口からうめき声となって漏れ始める。

黒髪の少年は返ってこない返事に顔を困惑させながら話を続ける。

「ひどいな、忘れちゃうなんて、俺の大切な人を奪って、俺のことあんなに犯したのに。俺のほうはヴァンさんのこと一日も忘れたことなかったのに。まっこれからやること見てれば思い出すよ。きつと」

ブン、グシャ

黒髪の少年は言い終わると同時に手に持っているハンマーの柄を長くしたような鈍器を男の左足に振り下ろし、叩き潰した。

「ぎゃあああああああああ！……！」

「まず一本と」

そういつて黒髪くろかみの少年は次の動作に入る。

「や、や、やめ、やめてくれ。俺が悪かった。俺が悪かったか……」

L

ブン、グシヤ

「あああああああああああああああ　あああああああ
！！！」

少年は痛みで叫び声をあげる男は見て表情を変えることなく一言。

「どうやら思い出したみたいだね。俺のこと、じゃーこれからヴァンさんがどうやって殺されるかもわかるよね。」

少年はラドンセルから液体の入ったボトルを取り出し、男の体にふりかける。

「今かけられるものわかる？油だよ。」

黒髪の少年は2本目のボトルをかけ終えたところで男に言った。

「さて、もう大方準備は終わったんだけど最後に言い残すことある？」

俺は少年の言葉に希望をみいだせずにはいられなかった。たとえば100パーセント殺されることが確定してようとこの一言をいえば助けてくれるのではないかと、もしかしたら見逃してくれるのではないのかと。

「ゆ、ゆる、ゆるひて、ください。」

だが、男の希望は間を持たず一瞬のうちに打ち砕かれた。

「無理、じゃ死んで。」

少年は部屋に置かれていたランプを男に投げつける。

ランプが落ちてくるまでの間、男の頭にはある光景が流れていた。相棒に体を押さえつけられている黒髪の少年、両足両腕を折られた全裸の少女、その少女に向かってファイアーボールの呪文を唱えている自分、男の回想はここで終わる。いや終わらせれる。

カシャーン之音と共に男の体は勢い燃え上がり、火は瞬く間に男の体を包んだ。

「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

痛い痛い熱い痛い熱いイタイ熱い痛いアツイイタイイタイ熱いアツイイツイシシニタイシニタイ死シ死シ死シ、全身を鋭い針で際限なく刺されるような、体の許容できる痛みを遥かに超えたナニかが脳に送り込まれる。脳が早く死ねと、早く死なせてくれと叫びだす。しかし、体は脳の意思を無視し、助かろうと、少しでも生きようと、火を消そうと床を転がる。

そんな中、部屋を出ようとした少年が何か思い出したように振り向き告げる。

「ヴァンさん達が集めたお金は貰っとくよ。死人には必要ないでしょ。バイバイ、一ヴァン・オブ・ヒューストン《クソヤロウ》」

そう言って平賀才人は扉を閉めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7530/>

アナザーゼロの使い魔

2010年10月9日20時48分発行